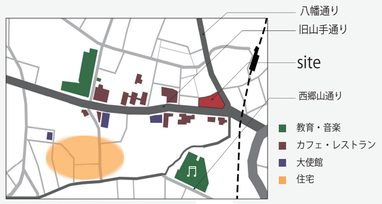
壁が作る人との距離

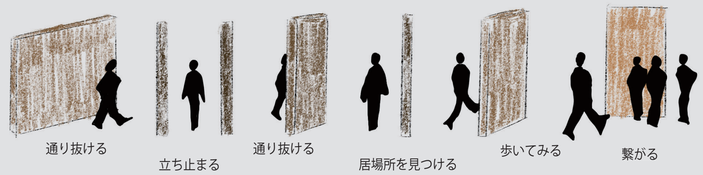


01｜計画地



敷地は東京都渋谷区代官山の旧山手通りと八幡通り沿いに位置している。旧山手通り沿いには、住宅、カフェ、レストラン、アパレルショップ、大使館、学校などが共存しており、西郷山通りには東京音大学のキャンパスや、音楽教室など音楽に関わる教育・活動の場も存在している。住宅、商業、文化、音楽などことなる要素が近接することで、多様な人や活動が集まる都市環境が形成されている。

02｜コンセプト



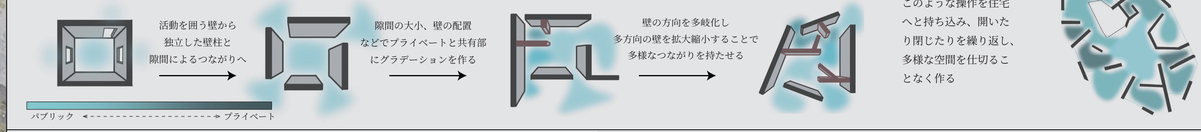
距離感の選択

独立した壁によって、住まいを閉じるだけでなく、開く・通り抜ける・立ち止まるといった多様な関わり方を生み出す。壁の間に生まれる余白を、住人と地域の人がそれぞれの距離感で過ごせるコモンスペースとしてつくり、住まいと街を緩やかにつなぐ。

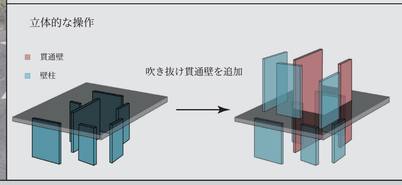
仕切る壁から繋がる壁へ

壁を単に空間を仕切るものではなく、空間をつなぎ、人の視線や動きを導くものとして捉えた。壁柱の隙間からその先の空間や人の気配が見えることで、「その先に何があるのか」という興味を生み、奥へと足を運ぶきっかけをつくる。また、壁柱の配置や向きを変えることで動線を緩やかに誘導し、壁で完全に仕切るのではなく、隙間によって領域を分けることで、空間同士が連続する複合的な場をつくった。

03｜デザインプロセス



このような操作を住宅へと持ち込み、開いたり閉じたりを繰り返し、多様な空間を仕切ることなく作る



平面的な壁の操作で横のつながりを作っていたところに、吹き抜けを設け壁を貫通させるように縦に伸ばすことで視線が上へと誘導され、水平性だけでなく垂直性を与える。



ヴォイドを三か所設けることで建物内部の最高を確保すると同時に、閉じた外観の隙間から見える明るく開いた空間に人々を誘い込む

04｜壁が作る奥行きと気配

壁柱によって空間を一度遮ることで、その先にある人や活動の気配を生み出す。壁柱は上下階にも連続し、視線が壁を越えて奥や上へと抜けることで、空間の広がりを感じられる。完全に見せるのではなく、見え隠れすることで「その先へ行ってみたい」という興味を生み出す。

- 貫通するように立った壁によって視線が自然と上えと誘導される
- 壁で完全に区切らず少し隙間を開けることでその先が気になる空間となる
- ストリートピアノの音色が壁の隙間を縫うように広がる



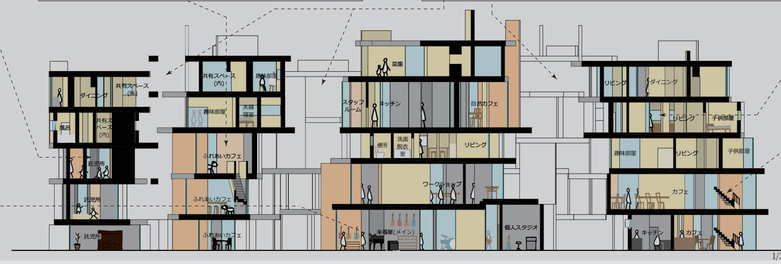
05｜断面から見る内部プラン

日の当たる託児所
託児所をあえて細く積み上げることで、光や風を施設全体から取り込み、子供たちは壁による日の当たり具合で場所を選ぶことができる。

奥へ奥へと広がる空間
楽器屋はフロアによって取り扱う楽器の種類を分けることが多いが、この建物では壁によって同じフロア内で多種の楽器を取り扱い、さらにストリートピアノやセッションルームを設け、人々が奥へと足を運び興味を深める空間となる。

関わりの選択
ペット同伴が可能なカフェスペース。ふれあいを目的としたカフェにすることで、人々が気軽にペットとふれあい、その関わり具合を壁により選択する。

中に開く
建物内には3つのヴォイドがあり、これによって少し閉じた外観から中の明るい空間が見え待ちゆく人の興味を引き立てる。また、ヴォイド付近の壁に自然光が反射し、施設内部へと柔らかい光が入り込む。



1/300 断面図

仕切らず区切る
住宅にも壁柱を用いて、空間のつながりと視線のつながりを操作し、家族間で気配を感じながらもその時の気分で居場所を見つけられる。

空間の選択
一階の座席数を少なくし、二階にメインの飲食スペースを設けることで視線を上へと誘導するとともに、二階の広々としたスペースで休憩したり、壁柱によって作られた少し閉じた空間で落ち着いた時間を過ごすことができる。

各住戸にはコモンスペースが設けられ、それぞれアトリエ、シアター、音楽、ペットなど様々な要素が広がっている。このような要素を壁によって人々を招き、壁によって空間を緩く分け壁によって生活空間へのグラデーションを作る。



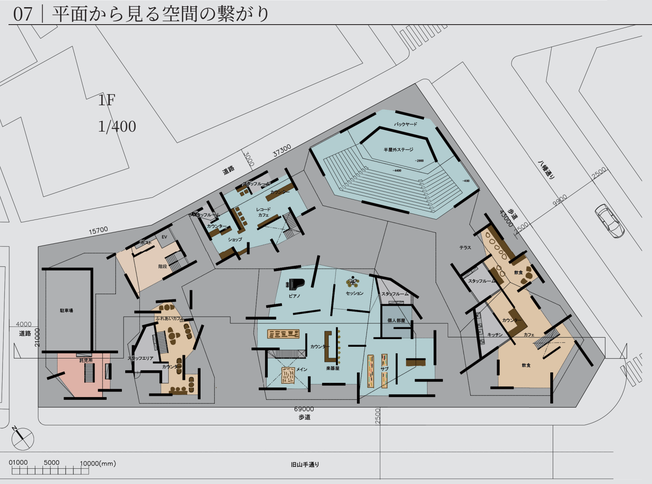
住宅内部も同じように壁による操作で空間を作り。趣味スペースやダイニングなどの比較的パブリックな空間を外に開き、さらにスラブ差により視線の抜け具合を調整している。これによりさまざま密度の空間が連続し、住人はその時の心地よい空間で過ごすことができる。



06｜繋がる住戸プラン

07｜平面から見る空間の繋がり

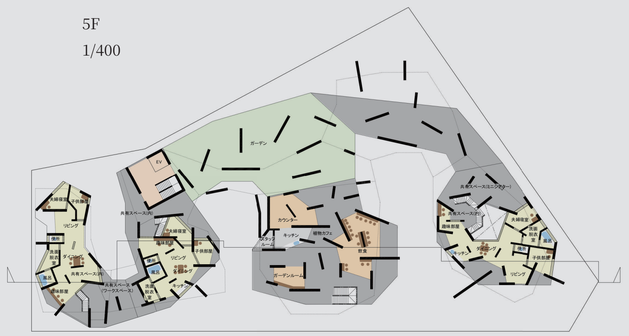
1F
1/400



3F
1/400



5F
1/400



施設全体に配置した壁は、空間を明確に分断するのではなく、隙間や視線の抜けをつくり出す。1階の共用施設では、壁によって異なる活動の場を緩やかに分けながら、人の動きや気配が交わる場所をつくる。上階の住戸では、壁の隙間から他の居場所を感じられることで、個々の暮らしを保ちながら住戸内に連続性を生み出す。1階から上階まで、壁を介して視線・動線・気配がつながることで、住人同士がそれぞれの距離感を選びながら関われる住環境を目指した。

5F 住宅
1/150



住戸内では、壁によって生活の領域を緩やかに分けながら、完全には閉じない構成とした。壁と壁の間に生まれる隙間は、視線の抜けや回遊動線となり、別の場所で過ごす家族の気配を感じることができる。空間を一つにつなげるのではなく、適度な距離を保ちながら視線や気配だけがつながることで、住む人がその時々に自分の居場所を選べる住戸を目指した。